真心考察

アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真心考察

【Ｎコード】
Ｎ５９５５Ｖ

【作者名】
アイス

【あらすじ】
私は手料理が大嫌いだ。
他人の料理を食べると、その人の感情をそのまま感じてしまう力のせいだ。だが、そんな私に転機が訪れたのは二十歳の夏、従姉の柊（しゅう）子（うこ）ちゃんが食事に誘ってきた日のことだった――――――――。

私は手料理が大嫌いだ。
嫌いと言うのは他人の作った手料理であって、自分の上手でも下手でもない手料理は食べられる。舌がとろけるほど美味しい他人の料理と失敗してクソ不味くなった自分の料理だったら、普通は前者を選ぶだろう。だが私は後者を選ぶ。
私だって、そりゃあ美味しい料理の方がいい。でも選べない。選びたいのに選べない。
だって他人の手料理には、作ったその人の心が宿っているから。
よく「真心のこもった手料理」などと言うが、あながち嘘じゃない。ていうか本当だ。断言する根拠は、私自身にある。

私は他人の手料理を食べると、その人の心をそのまま感じてしまうのだ。

その人が胸に抱いている喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、料理を口にした瞬間にそれらを全て感じ取ってしまう。その人が抱える詳しい事情などは分からず、ただ感情だけがそのまま伝わってしまうのだ。
感じるのが喜びや楽しみだけなら全然構わない。むしろそんな感情が伝わってくるなら楽しい。
だが、そうはいかない。嫌でも怒りや哀しみまで感じ取ってしまうのだ。食べた瞬間に、こっちまで嫌な気分になってしまう。
私はそれが堪らなく嫌いなのだ。美味しい料理を前にして喜んでも、口に運んだ途端に不愉快になる。折角の美味しい料理を、素直に喜ぶどころか憂鬱な思いに縛られながら食べなければならなくなる。これでは不味いものを無理に腹に詰め込むのと変わらない。
嘘じゃないしふざけてもいない。

私のこの奇妙な力を初めて実感したのは多分、三歳くらいの時だ。もちろん覚えていないけど、「初めてファミレスに連れてって、お子様ランチを食べさせたら何故か急に泣き出した」ってお母さんから聞いたことがある。お母さんとお父さんは当然、私の反応を不思議に思ってお子様ランチを口にしてみたが、ちゃんと美味しかったらしい。全然食べないから仕方なくお母さんたちの料理を食べさせてくれたらしいが、一向に泣き止まなかったらしい。

これは私の今までその力で経験したことを踏まえた推測なのだが、怒りや哀しみといったマイナスの感情は、作り手の気分が悪ければ悪いほどたくさん伝わってくるんじゃないかと思う。根拠はないのだが、喫茶店などの小さな店で食べた時と、ファミレスなどの客がいっぱい来る大きな店で食べた時では、後者で感じるマイナス感情の方が色濃い。客の数が多いと当然忙しくなり、料理人たちが疲れながら調理するからだろう。

まぁ、私はどっちの料理を食べたってマイナス感情で憂鬱になるのは変わりないんだから、そんなことはどうでもいい。

とにかく私は他人の手料理が大嫌いなのだ。

私が食べられるものといったら、自分の手料理とインスタントものや冷凍食品くらいだ。インスタントものや冷凍食品など、手料理でなければ人に出されても食べられる。まぁ、そんなものを人に出す人なんていないと思うが。

外食はもう出来ない。生まれてから二十年の間、外食をして良い思いをしたことなんてなかった。小さい頃は両親に連れられてレストランに行った。だがその度に嫌がる私の気持ちを配慮してくれたようで、家族で外食に行くことはいつしか無くなった。だが友達同士ではそういうわけにもいかず、友達に食事に誘われた時はけして顔には出さず、いやいや付き合った。それが嫌でさり気なく友達付き合いしなくなり、大学に行く以外は大体家に籠ることがほとんどになった。

だがこんな私でも、昔は一つだけ素直に喜べる手料理があった。

母の手料理である。
もちろん、母の手料理からもマイナスの感情は伝わったが、それには私に対する愛情がたっぷり詰まっていた。　小さな一人娘を愛する母親の愛情は、一緒に伝わるマイナス感情がちっぽけなものに思えるほど強くて暖かかった。
しかし母は、私が中学生の頃に亡くなった。不慮の交通事故だった。
父子家庭となったその後は、一日も欠かさず私が料理を作った。父も母と同じくらい私を愛してくれるし大好きが、残念ながら父の料理の腕前は最低クラスで、卵料理でさえまともに作れない始末だったので、私がやるしかなかったのだ。
だから母が亡くなって以来、他人の手料理で受け入れられるものは一切なくなった。
私だって他の人が作った手料理を食べたい。素直に喜んで受け入れたい。
でも出来ない。マイナスの感情を感じ取るあの瞬間とそれを食べている間が怖くて、とてもじゃないけど外食になんていけない。
そんな私に転機が訪れたのは、二十歳の夏だった。

＊＊＊

「ねぇ、私良い店を知ってるの。一緒に行かない？」
ケータイの着信音で目を覚ました私に食事の誘いを掛けてきたのは、従姉の柊子（しゅうこ）ちゃんだった。食事のお誘い、私が嫌で堪らないものだ。声に思わず怒気が籠った。
「私が外食嫌いなの知ってるでしょう？」
「だからこそよ。外食出来ないと将来困るわよ。特に社会人になったら、お付き合いなんかで外食は避けられないわ。それにもし彼氏

とかが出来て上手くいったら、結婚の話を持ち掛けられるでしょう？　そういう時は大抵外食よ」
そんなの分かってるよ。外食が出来ないなんて普通じゃないってことくらい。
だけど、それでも嫌なんだもん。仕方ないじゃない。
「大丈夫。そこ和菓子屋さんでね、とっても落ち着いたところだし美味しいのよ。何よりその店、外食嫌いの人なんかもよく訪れるのよ」
私は思わず「えっ」と声を上げていた。
「それじゃあ、今日の二時に駅前の本屋で待ち合わせね」
柊子ちゃんの嬉しそうな声でしまったと思った。声を上げたことを激しく後悔した。
「ちょっと待って。まだ行くなんて言ってないよ。こっちにだって都合あるんだから」
「どうせ用事なんかないんでしょう？　声からして、何となく今起きたばかりっぽいしね」
図星だった。それ故にこれ以上反発出来ないのが悔しい。
「とりあえず、一度入ってみるに越したことないわ。それに私が奢ってあげるから。ね？」
奢るとまで言われては首を縦に振らざるを得なかった。柊子ちゃんは友達が少ない私にとって数少ない話し相手だ。雰囲気を悪くするようなことは何としても避けたかった。
私は軋む体を無理やり起こした。体も精神も重い。重たい。
確か待ち合わせは二時だっけ。
今の時間を確かめようと携帯を開いた。もう既に十二時を過ぎている。服が寝汗でべしょべしょな上に、窓の外から差しこむ日の光が眩しくて熱かった。

「お待たせー」
本屋で文庫本を読んで待っていた私の肩を叩いたのは、満面の笑みを浮かべた柊子ちゃんだった。今年の秋で二十七になる柊子ちゃんは私より六つ年上のお姉さんで、質素なお団子ヘアと服装がよく似合う大和撫子風の女性だ。穏やかでのんびりとした口調も、彼女の質素な風貌に合っている。
「何か買ってく？」
「いい」
「そう。じゃあ行こうか。ここから自転車で少し走るわよ」
柊子ちゃんが背を向けて出口へと向かうと、私も文庫本を棚に仕舞って後へと続いた。駐輪場に置いた自転車に跨って出発する。
柊子ちゃんの後ろに付いて自転車を走らせること十分、柊子ちゃんが突然自転車を止めた。柊子ちゃんが自転車を降りたので私も降りた。
「確かこの辺りに……あ、あったっ」
「どこに？」
この辺りは駅前に近いから道は広いし車もよく通るけど、目立たない小さな店がぽつりと並んでいるくらいだ。それももう古過ぎて滅多に人が入らなさそうな店ばかり。
「あそこ」
と言いながら指差したのは、ほんの二・三メートル先にある小さなビルだった。
「小さな店って言ってなかったっけ」
「一階が店舗になってるの」
そう言われてからよく見ると、なるほど。確かに一階の部分にひっそりと『松岡堂』と書かれた小さな横長の暖簾を入り口に並べてぶら下げている。ビルと同化していてあまりにも存在感が無かったので、指差されるまで店だとも気が付かなかった。更によく見ると、ビル側面に『？和菓子老舗　松岡堂』と大きく書かれていた。
「行こう」

自転車をビルの前の邪魔にならないところまで移動させていく柊子ちゃんに、私も同じようについていく。さっきから柊子ちゃんの真似ばっかしてるな、とどうでもいいことを思った。店に近づいていくにつれ、風鈴の音がうっすらと聞こえてくる。

だが私の心内は、涼しげな風鈴の音とは裏腹に、ドキンドキンと忙しなく騒ぎ出していく。

また、あの感覚に苛まれるのか。

食べた瞬間に、美味と不快感を一緒に呑み込んで気持ち悪くなるあの感覚を。

柊子ちゃんは冷や汗を垂らす私を見て、何となく私の表情から不安の色を感じ取ったのだろう。柊子ちゃんは私の背中をポンポンと優しく叩いた。

「大丈夫。ここは本当に静かで居心地良いところだから」

「……うん」

もちろん、柊子ちゃんも私の力のことなんて知らない。おそらく人前で食べるのが苦手程度にしか思ってないだろう。だけど彼女の手からは、彼女なりの優しさが窺える。

こうなったら、余計帰るわけにはいかないじゃない。

私はもう半分ヤケになって足を前に進めた。その様子を見た柊子ちゃんが一足先に暖簾を潜った。私もまた後に続く。

「いらっしゃい」

カウンターから掠れた女の人の声が響いた。ここの女将さんだろう。店に入ると真っ先にショーケースが目に入った。多種多様の和菓子が並べられており、その上のカウンターには和風のガラス細工が可愛らしくならんでいる。

ショーケースを通り過ぎ、店の奥へと進む。店の奥は喫茶スペースとなっており、靴を脱いで畳に座る形になっていた。机には茶色と緑の配色のメニューが置いてある。

私と柊子ちゃんは一番奥の席に座った。店内にいる客は、ビルと同化した地味な店とは裏腹に意外と多かった。狭苦しいほどではな

いが、ほとんどの席が埋まっている状態だ。
「意外と人気あるのよ、この店。家族連れとかカップルもいるし、一人で来る人も多いわ」
ふふっと楽しそうに笑う柊子ちゃん。私も笑ったが、胸の内は実に複雑な気持ちでいっぱいだった。美味しいものを食べるのは好きだが、嫌な思いをしてしまうのだから。
カウンターから女将さんが出てきて、水とおしぼりを持ってきた。
「決まりましたら読んでくださいね」と愛想良く言い残し、カウンターへと戻っていった。
メニューを開くのは久しぶりだった。メニューを眺めている間は、まだ口にしてない故に食欲をそそられる。
素朴な和菓子の写真が載っており、一つ一つに簡単な説明が書かれている。いろいろ種類があって夏限定メニューもあったが、今日は半端なく暑いので冷たいものが食べたくなり、かき氷を選んだ。味は迷いに迷った末、金時ミルクを選んだ。小豆とミルクと氷という組み合わせに興味を持ったからだ。柊子ちゃんも暑いからとかき氷を選んだ。柊子ちゃんはかき氷だったら素朴な味を好むということで、普通のいちご味を選んだ。
「すみませーん」
柊子ちゃんが呼ぶと、カウンターからはーいとすぐに返事が返ってきた。テーブルとカウンターが近いっていいことだ。
「かき氷の金時ミルク味を一つと、いちご味を一つお願いします」
「はい。少々お待ちください」
女将さんは注文を取ると、私達のすぐ側にある大きな暖簾を潜っていった。どうやらこの暖簾の向こうで作っているらしい。おぉ、と年配の男性の声が聞こえた。暖簾を潜って女将さんがカウンターに戻るとほぼ同時に、氷を削る音が耳に入ってきた。
「今、男の人の声が聞こえたでしょう？　あの女将さんのお父さんなんだって」
「へぇ」

親子経営ってやつか。そう思ったら、ふとお母さんの手作り料理を思い出した。
「てことは、奥さんもどこかにいるの？」
これまで楽しそうに喋っていた柊子ちゃんが固まった。あれ、聞いちゃいけないことだった？
柊子ちゃんは固まった表情のまま周りを見回した後、身を乗り出してそっと私に耳打ちしてきた。
「奥さんはね、三年前ほどに亡くなったのよ」
「あ……」
無神経なことを口走ってしまったと思った。思わずカウンターとすぐ側の暖簾の向こうを交互に見る。
「大丈夫。他のお客さんの話声で幸い聞こえていないみたいだから」
柊子ちゃんのその言葉で、私はホッと胸を撫で下ろした。
数分もしない内に、カウンターから女将さんがおぼんを持って出てきた。私達のすぐ側の暖簾を潜り、注文したかき氷二つをおぼんに乗せて運んできた。
「お待ちどうさま。ゆっくりしてってね」
女将さんは笑顔を残し、カウンターへと戻っていった。
「美味しそうね」
「う、うん」
そしていざスプーンを手に取って氷に差しこむ瞬間、恐怖が私の手の動きを止めた。
今度は、どれくらい嫌な感情を味わうことになるのだろうか。
怖い、怖い……
「どうしたの？　顔色悪いけど、大丈夫？」
柊子ちゃんがかき氷に手を付けようとしない私を、心配そうに覗き込んだ。
「大丈夫、ちょっと氷の量が思ったよりも多くてびっくりしてるだけ」
「そう？」

口では納得したように言ったが、一向にこっちから視線を外してくれない。
怖い、怖い。
でも、ずっと見つめられても困るし……
……
……
一分後、柊子ちゃんが自分のかき氷が溶けるのも気に留めずに見つめ続けてくるので、私はもうヤケになり、勢い良く口の中に放り込んだ。

哀しくなった。とても酷い哀しみ。大切な宝物を永遠に失った、そんな感覚。
あぁ哀しい。胸が、苦しい。
でも、それだけじゃなかった。

何だか暖かかった。

氷を食べているはずなのに、心がとても暖かい。
何だろう、この感覚。哀しいけど、全然嫌じゃない。それどころか、何だか頑張れと背中を押されている感じがする。
「千尋？　どうしたの」
「え」
「泣いてるよ」
「え？」
そう言われて、私はそっと頬に触れていた。
確かに、頬が濡れていた。
何で私、泣いてるんだろう。てゆーか、何泣いてるの。変に思われちゃうじゃない。現にチラチラと視線感じるし。
でも、止まらない。
私の頭の中はすっかり錯乱してしまい、泣きながら「美味しい美

味しい」と言って食べた。小豆の甘さとミルクのコクと氷の柔らかさを口に含む度、私の涙腺がどんどん緩んでいく。
終いには、女将さんとおじいさんの親子二人が出てきてこちらへやって来る羽目になってしまった。
「どうしたの？　大丈夫？」
「どっか、痛いのかい？」
柊子ちゃんに加え、親子揃って心配そうに覗き込んでくるので、私は居てもたってもいられなくなって泣きながらも口を開いた。
「いえ、すみません、大丈夫です。このかき氷が美味しくて、美味しくて」
もう自分でも何を言っているのか分からなかった。止めたいのに涙が止まらない。かき氷を食べるのを止めれば治まるのかもしれないが、どうしても食べたかった。
何だろう。この暖かさ。
どうしてか、懐かしい。
「具合が悪いわけじゃないんだね？」
女将さんが尋ねてきたので、私は「はい」と言いながら頷いた。
「良かった良かった。それにしても、泣くほど喜んでくれる客なんてアンタが初めてだよ」
「いや、そうでもないぜ」
そう言ったのは、女将さんのお父さんだった。
「悪いけど、ここじゃなんだから、ちょっと奥に来てくんねーか？どうしても話したいことがあってね。そこの御嬢さんも一緒にな」
「あ、はい。それじゃあ、すみません。お邪魔します。ほら千尋、行こう」
「うん。あ、お邪魔します」
「あ、ちょっとお待ち。かき氷も持ってかないと」
女将さんはカウンターからおぼんを取り出すと、せっせと私達のかき氷を乗せてくれた。
「あ、すみません」

「いいよいいよ。アンタ達はお客様なんだから」
気風の良い女将さんの対応に、柊子ちゃんが笑顔を浮かべる。
何だか大事になってしまったなと思いながら、私は柊子ちゃんと一緒にすぐ側の暖簾を潜り、奥の部屋へとお邪魔させて頂くことになった。

休憩所として使ってるらしい小さな座敷の部屋で、私達はかき氷を食べながらお話しを聞くことになった。私はやっぱり泣きながら聞く体勢となってしまう。
「今から二十年近く前の冬になぁ、一人の珍しい客が来たんだ。普通のサラリーマンで見た目は普通なんだけどな。まぁ早い話、御嬢さんと同じでしることを食った瞬間に泣き出したんだ。そん時は閉店間近で、その日の最後の客だったから、店を閉める前に折角だからと家の家内が訳を聞いたんだ。んで話を聞いたら、一週間前に母親を亡くしたって言うじゃねーか。何とも、そのサラリーマンが子供の頃、母親がおやつにしることを作ってくれてたみたいでな、んでしることを食って母親のことを思い出して泣いちまったらしい。悪いこと聞いちまったなっつったら、『いいえ、母のしることを思い出せてとても幸せです。ありがとうございます』って例を言われちまってな」
ハハハと思い出し笑いをするおじいさん。どうやら女将さんは知らなかったらしく、素直に驚いていた。「お前ぇはまだ子供だったからなぁ」とおじいさんがまた笑う。
「まぁお嬢ちゃんにもそういった事情があるんだろうが、ここは敢えて聞かないことにしとくぜ。どうしても話したきゃあ聞くけどよ」
「……いえ、大丈夫です。ありがとうございます」
今の私には、話したくても話せなかった。まだこの涙の正体が分からないからだ。

「家の家内もしるこが大得意だったからなぁ、そのサラリーマンが帰った後大喜びだったぜ。『私の作ったしるこで誰かが泣いて喜ぶなんて、夢にも思ってなかったわ』ってな。そんな家内も、三年前に逝っちまったんだけどな」
「私、その奥さん知ってます。三年ほど前からこの店に時々寄ってるので」
　そう言ったのは柊子ちゃんだった。私もその奥さんに会ってみたかったなぁとふと思った。
「おしるこも食べたことあります。私、あのおしるこが大好きで」
「そうかそうか。そいつぁありがてぇ」
　おじいさんは嬉しそうに声を上げると、再び話を始めた。
「本当言うと、家内が逝った後はしるこをメニューから外そうと思ってたんだよ。あのしるこは家の家内だからこそ出せる味だからな」
　確かにメニューを見た時、ちゃんとしるこの写真も載っていた。
「だが死ぬ直前に『私のおしるこが人に元気を与えられるものだと、死ぬ前に実感出来て良かった。出来ることなら、もっと長生きしてもっとたくさんおしるこ作って、もっとたくさんの人を喜ばせたかったけど、それは贅
沢よね』って言ってたからよ、しるこをメニューから消すぐらいなら俺たちが後を継いでやろうと思ったんだ。俺たちでしるこを作って、もっと多くの人を喜ばせてやろうって」
「でも、今回はかき氷だったけどね」
　肩を竦めながら女将さんが言った。
「う、うるせぇ！　母ちゃんはかき氷だって大得意だったじゃねーか！　特に金時とか」
「そっか。どっちにしろ小豆が入ってるものね」
「分かりゃあいいんだ」
　親子二人のテンポの良い会話が何だか微笑ましくて、私達は顔を見合わせて笑った。
　いつの間にか、私の涙は完全に止まっていた。

＊＊＊

その後、かき氷を食べ終わった私達は深々と頭を下げながら座敷を後にし、カウンターで会計を済ませた。今回は奢りということで柊子ちゃんが全部払ってくれた。その際、「今日は特別」と女将さんが囁いて五百円ほどまけてくれた。

「家の父ちゃんと母ちゃんの思い出話を聞けたのは、アンタ達のおかげだからね」

私達は二人でまた深々と頭を下げた。でも折角なので、私はお土産で水ようかんを買っていった。私にとっても、あのおじいさんの話はとても楽しかったから、ささやかなお礼として何か買いたくなった。

そしてペコリと頭を下げながら暖簾を潜って店を出た。しばらく二人であのお話しことを思い出しながら自転車を引いて歩き、駅前で少しぶらぶらしてから待ち合わせした本屋の前で別れた。その際に、またあそこの店に行こうと私から言い出したら、柊子ちゃんは「誘い出した甲斐があったわ」と嬉しそうに帰っていった。

わたしは家に着くまでの間、自転車を走らせながらおじいさんの話を思い返していた。

最初はあのかき氷を食べた瞬間、何で涙が出たのか理解出来なかったけど、話を聞いて確信した。

わたしはあの瞬間、お母さんのことを思い出したのだ。かのサラリーマンと同じように。

そしてあの暖かさの正体も、少しずつ分かってきた。

あれは、おじいさんと女将さんの奥さんに対する愛情だ。奥さん

の思いを引き継ぎ、たくさんの人を喜ばせるという彼らの深い愛情。
あぁそうか。あの時感じた懐かしさ。
あれは、お母さんの愛情と同じだ。
娘を想う母親と同じく、妻を想う夫とその娘の深くて強く、そして暖かい愛情。
作った人の感情をそのまま感じてしまう私は、他人の手料理が苦手だ。
でも、あの親子の暖かい真心はまた感じたい。また彼らの作った菓子が食べたい。
信号が赤になったので、自転車を止めてふと顔を上げた。
仄かに紫がかった青い空は、吸い込まれてしまうほど綺麗だった。

（後書き）

ご意見とご感想、お待ちしてますｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5955v/

真心考察

2011年8月8日03時29分発行